

- 年月日：1968年9月3日  
 用務：日本における人口問題研究状態の視察  
 連絡機関：IPPF, Western Pacific Regional Office
- Miss Khoo Chian Kim：シンガポール政府統計官  
 年月日：1968年9月3日  
 用務：日本における人口問題研究状態の視察  
 連絡機関：IPPF, Western Pacific Regional Office
- Dr. J. Sutter：Institut National d'Études Démographiques, Paris, France  
 年月日：1968年9月7日  
 用務：第8回国際人類学民族学会議出席のため来日の機会に本研究所視察
- Dr. Hubert Reynolds：Cultural Research Center, Silliman University, Dumaguete City, Philippines  
 年月日：1968年9月9日  
 用務：第8回国際人類学民族学会議出席の機会に本研究所視察  
 連絡機関：Cultural Research Center, Silliman University
- Dr. Laila Shukry El Hamamsy：Social Research Centre, American University in Cairo, U.A.R.  
 Dr. Saad Gadalla：上に同じ  
 年月日：1968年9月14日  
 用務：第8回国際人類学民族学会議出席の機会に本研究所視察
- Dr. Lucile F. Newman：Professor, University of California, U. S. A.  
 年月日：1968年9月16日  
 用務：日本の家族計画に関する事情聴取（第8回国際人類学民族学会議出席後立ち寄ったもの）

## 第15回日本都市学会大会

第15回日本都市学会大会は、昭和43年7月20～22日の3日間にわたり北海道帯広市市民会館で開催された。本研究所からも黒田俊夫、岡崎陽一、内野澄子の3技官が出席した。

研究発表は、シンポジウムと自由発表に分けて行なわれたが、本年度のシンポジウムの課題は、Ⅰ「都市学成立の理論と課題——高密度社会における都市の理論」（21日午前）と、Ⅱ「北海道開発と都市問題」（21日午後）であった。前者は本学会が3年来取り組んでいる根本的課題であり、本年度は高密度社会における都市問題を中心として、笹森秀雄（北海道大学）、松原治郎（東京大学）、恒松制治（学習院大学）3氏の発表があり、討論が行なわれた。後者は、開催地である北海道の当面する開発問題と都市問題を取り上げたもので、池田善長（北海学園大学）、籠山京（北海道大学）、小野寺俊一（帯広市役所）、伊藤善市（東京女子大学）、太田實（北海道大学）諸氏の報告があった。

自由発表は、第1部会、第2部会あわせて11題の発表があったが、本研究所関係者の報告は次のとおりである。

関東メガロポリスの可能性……………黒田俊夫  
 大都市圏における労働力の変化について……………岡崎陽一  
 都市人口の集積パターンの分析……………内野澄子

そのほか、磯村英一氏（東洋大学）「メガロポリスと首都性」、黒沼稔氏（成蹊大学）「科学としての都市学——高密度社会化過程における都市理論の前提」などがあった。

本年度大会の焦点は、高密度社会と都市問題におかれたと言ってもよく、もちろん結論を得るには至らなかったが、きわめて活発な討論が行なわれ、今後の研究課題が提起された。

なお、理事会において第1回奥井賞の受賞者（慶応大学矢崎武夫・大分大学森川洋の両氏）が決定され、このことが総会に披露された。また、7月22日には帯広市内および周辺部の見学会がもたれた。

（岡崎陽一記）

## 日本統計学会第36回総会・研究報告会

昭和43年度の日本統計学会は、9月6・7両日にわたり、一橋大学において開催され、本研究所からは舘稔、上田正夫、岡崎陽一、山口喜一の4技官が出席した。

研究報告会は三つの会場に分かれて行なわれたが、予定されたプログラムにおける一般研究報告は46題であった。そのうち人口に関連のある報告としては次のものがあった。

人口移動の統計分析——第3次産業を中心とする分析——……………岡崎陽一  
人口の社会移動と年齢構造の変化……………仮谷太一  
人口移動と年齢構造・出生との関係……………上田正夫  
年齢別死亡数の社会医学的考察——主として明治23年以降の歴史的観察による——  
……………飯淵康雄  
日本のモデル生命表……………安川正彬  
伝染病の周期的および季節的変動……………川上理一

なお、本年度の共通テーマ報告として「社会科学における統計的方法」（6日）と「情報処理と統計学」（7日）の2題があった。

（山口喜一記）

## 第8回国際人類学民族学会議

第8回国際人類学民族学会議（VIIIth International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences）が去る9月3日より10日まで、東京都千代田区の全共連ビル（3～7日）ならびに京都市左京区の京都国際会議場（9～10日）を会場として開催された。この会議の母体は、パリに本部を置く Union Internationale des Sciences Anthropologiques et Ethnologiques で、4年目ごとに国際会議を開催しているが、アジアでこれが開催されたのは今回がはじめてである。会議の President（同時に Union の President）は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長 岡正雄教授がつとめられた。海外からの参加国48か国、参加者684名、国内からの参加者452名という盛況であった。

会議では、Sectional Meetings, Symposia および Working Groups において、種々の研究発表、討論が行なわれたが、Sectional Meeting はまず、A. Anthropology, B. Ethnology, C. Archaeology, D. Demography, E. Museology の五つの Division より構成され、Anthropology および Ethnology の Division は、それぞれ8および13の Section に分けられた。シンポジウムは人類学関係のものが8、民族学関係のものが10行なわれた。

人口学領域からみても今回の会議の特徴の一つは、この国際人類学民族学会議で Demography の Division が設けられたことである。人類学民族学領域における人口学的研究の活動は、いまだ目だたないほどのものであるが、それでも近年しだいに活発になりつつある。今回、この会議に Demography が一つの Division